男子スイーツ倶楽部

朝日 慧子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
男子スイーツ倶楽部

【Ｎコード】
Ｎ５３６２Ｙ

【作者名】
朝日　慧子

【あらすじ】
性格の全く違う個性派男子四人組が、“スイーツ”という共通の趣味を通じて出会い、それぞれの悩みに向き合っていく。
元モデルと俳優の間に生まれた悠は、他人に興味がなく恋愛願望もまったくない“無気力”な高校生。モテすぎる人生のせいでイヤミな性格になり、人生を舐めてかかっていた。ところが、運命のイタズラで禁断の恋に落ちてしまい、泥沼から抜け出せなくなってしまう。修太は五浪して医学部に入ったエリート一家の長男だが、異常な女遊びから抜け出せない。対人恐怖症アニメオタクの大は、人の

気持ちに鈍感なフリをしてひたすら傷つくのを恐れている。鼓太郎はコールセンターでクレーム処理のバイトをしながら、自分の奥底に抱える悩みを大切な人に打ち明けられずにいた。

ジャンルは、たぶん恋愛系学園モノです。

1

春のそよ風が優しく頬を撫でる。誰もいない屋上で胡坐(あぐら)をかいて座り、両膝の間に無造作に焼きそばパンを置く。紙パックの牛乳を慣れた手つきで開けると、そのまま上を向いて口に流し込んだ。

「悠(ゆう)、お前ってすっげぇのな」

クラスメイトの山川(やまかわ)　洋人(ひろと)が、俺の名前を呼びながら重い鉄扉の向こうから顔を出した。洋人とは小学校時代からの腐れ縁で、今も同じクラスだ。昔から背が低いのが悩みで、毎日のように「何食ったらそんなにでかくなれんだよ」と突っかかってくる。洋人は切れ長の目をさらに細くして、俺の隣に腰をかけた。

「かっこいい奴はぜってー得だよな。俺もそんな顔だったら人生変わってたのに」

「はぁ？　何だよ」

俺は話の糸口が見えず、イラっとした声で聞き返した。外見のことで褒められるのは慣れている。母親は元モデルで父親は俳優。両親のＤＮＡを引き継いでいるのに、見てくれの悪い子が生まれて来るはずもない。この世に生を受けた日から、俺は「かっこいい」という形容詞と共に人生を歩んできたのだ。だから、今さら外見を称賛されたくらいでは何も嬉しくない。むしろうざったく思えてしまう。

「悠の顔、借りちゃったよ」

「意味わかんねぇよ。お前の言ってること」

「聖マの女子からも友達になりたいってじゃんじゃんメールが来るんだよ」

聖マというのは、隣接している聖マヌエル女子高校の略称だ。

「メールってなんだよ？　俺何もしてねぇけど」

「なぁお前ってさ、携帯でネットとかやってないだろ？」

洋人は少し小馬鹿にしたような顔つきで俺を見た。

「携帯なんて通話しか使わねぇし」
「いまどきそれはないって。メールとかネットとか普通はするっしょ」
「俺には必要ない」
「悠、お前損してるよ。いくら光源氏でもなー」
「は？　なんで俺が光源氏なんだよ」
「お前のあだ名」
「勝手につけんなよ」
「この前、古文で『源氏物語』やったじゃん。光源氏っぽいよな、お前って」
「いや、俺は女に興味ないから」
「もったいねぇな。その顔だけであんなに女子が集まるのにな」
「だから、さっきから何だよ。俺の顔を利用して何かしたのかよ？」
洋人は制服のジャケットから携帯電話を取り出し、俺の目の前に「これ」と差し出してきた。そこには、はにかんだように笑う俺の顔写真と簡単なプロフィールが載っていた。

所属：緑が丘第二高校　二年Ｃ組
血液型：Ａ型
誕生日：１９９４年１２月２４日（１７歳）
自己紹介：埼玉県所沢市に住んでます。帰宅部だけど、彼女募集中。ヨロシク！

「なんだよこれ」
「まぁ、慌てんなって。お前のこと書いたら、すっげー数のアクセスがあったんだ」
「個人情報の垂れ流しじゃないかよ」
「自己紹介ならぬ他者紹介、なんてな」
「嘘ばっか書いてんな。彼女なんて募集中じゃないし」
「悠、恋愛しろ」

「お前に言われたくない」
「好きな女でもできれば、その性格も直るだろ」
「俺は理想が高いんだよ」
「いいから聖マの女子と付き合っちゃえよ。あそこだって金持ちのお嬢様だらけだぜ？」
「早く消せよ」
「消すって何を？」
「俺の個人情報を消せって言ってんだよ」
「あーあ、つまんねぇの。Wデートでも実現するかと思ったのに」
「彼女もいないくせに何がWデートだよ。ったく、勝手に写真まで使われるし最悪だな」
　思いっきり不機嫌そうな顔を浮かべた途端、洋人は逃げるように「じゃ、また教室で。遅れんなよー」と言いながら足早に去っていった。あいつは昔から俺の顔色を見て、いよいよヤバくなってくるとさっさと逃げる癖がある。俺はイライラする気持ちを抑えながら、ゆっくり立ち上がり四月の空を見つめた。細長い雲がゆらゆらと風に揺られて棚引いている。
――そうだ、今日はこのままサボろうか……。晴れた温かい日には昼寝の誘惑に負けてしまうことがある。大きく伸びをしてから、冷たいコンクリートの上にゴロリと寝転がった。少し風が冷たいような気もしたが、そのままうとうとと浅い眠りについた。

2

「コラッ！　櫻井悠！」
耳をつんざくような甲高い声で名前を呼ばれた。
「また授業サボったんでしょ」
仰向けに寝転がったままうっすら目を開けると、茶色がかった二つの大きな瞳が俺を見つめていた。その距離、数センチ。何度かまばたきをしているうちに、俺の顔のすぐそばに立っているのが青木あかねだということに気づいた。
「あのさ、パンツ見えてるんだけど」
あかねはものすごい早さでスカートを両手で押さえた。そして、怒ったような顔で「ひどい」とか「冷たい」とかブツブツと文句を言い始めた。あかねとは幼稚園のころからの付き合いで、今でも母親同士がお互いの家に行き来してお茶を飲んだりしている。家族ぐるみでキャンプに行ったり、誕生日パーティなどを催したこともあった。さすがに俺たちが中学生になったころからは全員で集まることも減ってきたが、あかねの家族とは今でも会えば挨拶程度はしている。だが、一年程前に突然、あかねに「好きだ」と告白された。容姿は美人の部類に入るし、性格も快活で人懐っこく、友達やクラスメイトからの人望も厚い。これといってマイナス点はなかったのだが、俺はすぐに断った。どうしてと聞かれた時に「面倒だから」と告げた途端、その日から何をしても「冷たい人間だ」と言われるようになってしまった。告白をハッキリ断るのは、あかねの指摘通り冷たい人間のすることなのだろうか。はぐらかして蛇の生殺し状態にしておく方がよっぽど冷酷だと思うのだが。
「先生が探してた。櫻井はまたサボりかって。見つかったらかなり怒られるよ」
俺はあかねの方を一瞥(いちべつ)し、無言のままで小さくため息をついた。
「悠って何に対しても興味ないよね？　それって無気力症候群じゃ

ないの？」
「これは生まれつきだから」
「無気力症候群って今若い人の間でも流行っているんだって。やる気とか目標がなくて、感情も乏しくなっていくらしいよ。うつ病とも共通点があるみたい。昨日、テレビで特集やってて見たんだ」
　あかねは知識をひけらかしたいようで、早口気味で喋り続けた。
「本人も生きがいが感じられなくて辛いんだって。もし悠がそうなら早めに私に言って。あ、私じゃなくてお母さんとか誰でもいいから。ねっ？」
「あのさ、ちょっと頼みがあるんだけど」
「何？」
　俺は人に頼みごとをすることが滅多にない。そのせいか、あかねは嬉しそうな顔を浮かべた。
「このプロフィール、消してくんない？」
「ちょっと見せて」
　あかねは俺の手から携帯をさっと取り、慣れた手つきでカチカチとボタンを押し始めた。
「これ、悠が登録したの？」
「そんな訳ないだろ」
「じゃあ、洋人でしょ？　あいつならやりかねないもん」
「とにかく消してくれよ。洋人にも言ったんだけど、どうせ忘れてそうだし」
「悠もさ、これを機に練習したら？　いつまでも通話のみなんてお爺さんじゃあるまいし」
「ジジイで悪かったな。俺には通話で十分なんだよ。メールだのネットだのってメンドくせぇし」
　六時間目の始業を告げるチャイムが鳴った。あかねはハッとした表情で「あとでね」と言い残し、鉄扉の向こうに消えて行った。

3

ホームルーム中、物音を立てずこっそりと教室へ入っていくと、担任の大山由香がプリントを配っている最中だった。一番後ろの窓側の席に近づき、椅子をゆっくりと引く。その時、上靴の縁と椅子がぶつかってカツンと高い音が鳴った。クラス中の連中が俺の方を向く。大山も俺の方を見た。

「また櫻井君なの？　放課後話があるから、進路相談室に来なさい」

プリントを手に持って俺の席までツカツカと歩いてくると、鋭い声でそう言った。大学を卒業して二年目に初めてクラス担任を任された大山は、この腐った社会を教育で変えられる――そんな風に考えている新米教師だ。

俺は他人に自分の悩みを相談したいなんて微塵も思わない。それなのに放課後に呼び出されて一体何を話せと言うのか。大山と話すのはかなり億劫だったが、担任から母に電話がいってしまえばもっと面倒なことになるだろう。放課後、進路指導室の前の壁にもたれかかっていると、大山が廊下の向こうから小走りで駆け寄って来るのが見えた。そして、手に持っているカギで解錠してからドアを開け、俺にも入るようにうながした。大山は二人掛けのソファーに足を組んで腰をかけ、俺にも目の前にある向かい側の三人掛けの茶色のレザーソファーに座るように言った。

「櫻井君、悩みがあるんでしょう？　だから、そんな態度を取るのよね？」

大山はなだめるような声で俺の目を見つめた。

「いいえ」

「櫻井君の家はお母さんひとりで子育てをしているんでしょ。それなら大変よね」

「大丈夫です」

「無理しなくていいのよ。私はあなたの担任なんだから。ちゃんと

正直に話してみて。私が力になるから」
　大山はしつこかった。俺が感情を表に出さないのをいいことに、お節介オーラを発したまま十分以上も説得を続けてきたのだ。
「私は櫻井君が心配なの。今まで、母子家庭の子を何人か見てきたけど、どの子もいろんな問題を抱えていたわ」
「俺のどこに問題があるって言うんですか？　授業に出ないからですか？」
「それもあるわ」
「じゃ、本当の事を言いましょうか。うちの学校はレベルが低い。俺にとっては昼寝の時間でしかないんですよ。どっちにしろ授業なんか出たって出なくなって同じです」
「たしかに櫻井君は成績優秀で常に学年一位を保っているわね。それは私も認める。でもね、学校は勉強を教わるだけの場ではないのよ。人間関係とか道徳とか、そういうことも学んでいく場なの。だから、いくら成績が良くても授業をサボってはいけないわ」
　俺は何の反応も示さずに黙っていた。すると、大山は少しイライラしたような口調で言い放った。
「櫻井君、聞いてるの？　理解したら返事くらいしてちょうだい」
「あの、帰ってもいいですか」
　俺は呆気に取られている大山の返事を待たず、ドアを開けて廊下へ出た。

4

後ろから大山が何かをごちゃごちゃ言いながら追いかけて来る。本当に面倒な女だ。俺の態度が気に食わないのか、声を荒げながら早足で近づいてきた。俺は歩くスピードを変えずそのまま玄関へ向かい、外靴に履きかえた。その時、突然ゴーッという音がして地面がゆらゆらと大きく揺れるのを感じた。地震なら震度４ぐらいだろうか。背後で「キャッ」という小さな悲鳴が聞こえた。振り向くと、俺のすぐ後ろには顔面蒼白で頭を抱えてうずくまっている大山がいた。グレーのタイトスカートから伸びる細長い脚はガタガタと震え、肩まである黒い髪の毛は手で押さえられているせいかグシャグシャになっていた。

揺れはおさまらない。大きな横揺れで下駄箱に収まっていた靴がいくつか頭上に落ちてきた。俺は咄嗟（とっさ）に後ろへ数歩下がり、頭と体をすっぽり包むようにして大山に覆いかぶさった。揺れは数秒後に完全に収まった。だが大山はまだ半泣き状態で、体を小刻みに震わせている。数メートル先で生徒たちがざわざわと騒いでいる声が聞こえてきて、俺はハッと我に返った。すぐに大山から体を離して立ち上がると、自分の靴を手に持って玄関へ出た。

「悠ちゃん、珍しいわね。あなたが携帯をいじってるなんて」

母の朱莉（あかり）がキッチンで料理をしながら、俺の方をチラチラ見て声をかけてきた。

「こうやって見てると、悠ちゃんもイマドキの高校生よね」

ウキウキしたような声で「今日はハンバーグにしたわよ。おいしそうでしょ」と言い、ダイニングテーブルに平皿を置いた。テーブルの上には、防水加工がされたオレンジ色のランチョンマットが二枚敷いてあり、それぞれのマットの上にハンバーグの乗ったお皿とご飯茶碗、そして味噌汁の入ったお椀が置かれていた。テーブルの

真ん中には、ガラスのボウルに入った生野菜のサラダも乗っている。俺は母さんと向かい合って座り、静かに箸を取った。
「大根おろしとポン酢って合うのよ。今日は和風おろしハンバーグにしてみたの。大葉を乗せると彩りもいいでしょ。どう？　おいしい？」
「おいしいよ」
俺は小さく笑った。
「学校はどうなの？　楽しい？　悩みがあったらいつでも言うのよ」
「心配してんの？」
「忙しくてなかなか家にいられないことが多いでしょ。私は悪い母親ね」
「そんなことないって」
「悠ちゃん、あかねちゃんとか洋人くん以外に仲の良い子はいないの？　彼女ができたらお母さんにも紹介してちょうだいね」
「あぁ」
「今週の土曜、空けておいてくれる？」
「なんで？　どっか行きたいの？」
「悠ちゃんに紹介したい人がいるの」
「もしかして彼氏？」
「まぁね。うちで一緒に夕食をしようってことになったのよ」
「わかった。空けとくよ」
「もし悠ちゃんが気にいらなかったら、別に諦めてもいいって思ってるの」
母さんは申し訳なさそうな顔を浮かべ、箸を置いて俯いた。
「どうやって知り合ったの」
「ＭｉｎっていうＳＮＳサイトで。最初はネットから仲良くなって、付き合うようになったのよ」
俺はもやもやした気持ちのまま、自室に戻ってパソコンのスイッチを入れた。これまでは必要な時以外はインターネットに接続するという行為自体を避けてきた。だが、今は母のことが気にかかって

仕方ない。検索窓に「Ｍｉｎ」と入力してみると、会員登録の画面が出てきた。母の相手のことを調べるには自分も会員にならなければならないらしい。

母のページには、相手の男の顔写真が出ている。高校生と中学生の子どもがいるらしい。離婚歴は一回。ネット上によく個人情報を載せるなと半ば呆れながらも、男の素性がわかって少しホッとした。Ｍｉｎにはグループというものもあるらしい。母のページには、「簡単料理の会」や「洋画大好きな人集まれ」と書かれたいくつかのグループ名が載っている。相手の男の方のページにも「洋画大好きな人集まれ」というグループが載っている。もしかすると、このグループを通じて二人は知り合ったのかもしれない。サイトをぐるぐる回っているうちに「男子スイーツ倶楽部」という文字が目に飛び込んできた。男子限定でお菓子好きが集まるグループらしい。発足は約１ヵ月前。会員数はゼロ。Ｍｉｎで母とその男を見張るには自分も多少はアクティブな会員になっておく必要がある……ふとそんな思いが頭に浮かび、俺は「入会する」と書かれたボタンを押した。

5

Ｍｉｎに登録して数日経った頃、「承認のお知らせ」というメールが届いた。どうやら管理人の鼓太郎とよばれる人物が、俺の入会を許可したらしい。実のところ、さっきまでは入会希望を出したことすら忘れていたが、ネットの世界に足跡を残すことで本格的に自分の知らない次元に足を踏み入れたような気がした。

「悠ちゃん、まだ支度できないの？」

母さんがドアをノックした。

「今着替えてる」

俺は手短に答えると、パソコンデスクを離れ、ベージュのチノパンとブルーのＴシャツを素早く脱いでベッドの上に放り投げた。クローゼットの中にかかっている白いシャツに手をかけ、慣れた手つきでボタンを留める。グレーのズボンを履き、緑と白のチェックのネクタイを締めて、ドアを開けた。母さんは真っ赤なノースリーブのドレスを身にまとい、肩から白いストールを巻いている。そして、目の前でくるりと回って見せた。

「なんで俺だけ制服なわけ？」

「高校生なんだから制服が一番よ。それに進学校だってこともアピールできるでしょ。ほら、鏡を見て」

母さんは部屋に三歩ほど入り、姿見を俺の前まで持ってきた。

「ね？　似合うでしょ？」

「ま、いいけど。母さんの好きなようにすればいいよ」

鏡の中の母さんは満足げだった。

「寝ぐせも直すのよ。あと十分で約束の時間だから、遅れないで下に来て」

母さんはそう告げると、軽い足取りで階段を下りて行った。考えてみれば、俺は小さい頃から母さんの喜ぶことを意識的にするようにしてきた。逆らって困らせることはほとんどなかったように思う。

世間一般では思春期になると、子どもは親に生意気な態度を取り始める。いわゆる“反抗期”というものだ。俺はこの反抗期を体験していない。反抗しようとする気持ちすら起こらなかった。それはきっと、母さんをこれ以上悲しませなくなかったからだと思う。黄色い帽子を被って幼稚園に通っていた頃、突然父親がいなくなった。母さんは平日フルタイムでピアノ講師とモデルスクールの講師を掛け持ちしていたせいか、比較的時間に融通の利く父親が幼稚園の迎えに来ることが多かった。だがその日、父親は現れなかった。日が暮れても、夜になっても姿を見せることはなかった。

「初めまして、西園寺です」

口にもしゃもしゃのヒゲを生やし、黒ぶちの眼鏡をかけた中肉中背の男が俺の目の前で右手を差し出した。反射的に自分も右手を出して軽く握ると、俺の冷たい手とは対照的に西園寺の手は少し汗ばんでじっとりしていた。

「こっちが長女の小夜子（さよこ）、そして次女の菜々子（ななこ）です」

ぱっちりした目元が特徴的な菜々子と呼ばれる少女は、物珍しそうに俺の顔を上目遣いに見て「うわっ、本当にイケメンじゃん」と姉の小夜子の耳元で囁（ささや）いた。

「菜々子、やめなさい」

小夜子は妹をたしなめるように、鋭い声で制した。小夜子は菜々子とは対照的で、全体的にぼんやりとした顔つきをしている。色素がもともと薄いのだろう。茶色がかった髪の毛に栗色の瞳、薄い唇がピンクに色づいている。俺の方を見て少し微笑むと、「同じ2年生ですよね。よろしくおねがいします」と丁寧な言葉遣いで頭を下げた。

6

「悠ちゃん、悪いけどお母さん今日は遅くなるから。晩ご飯は適当に作って食べてて」
「わかったよ。気をつけて」
俺は自分の部屋にこもったまま、ドア越しに話しかける母さんに返事をした。晩ご飯なんて何でもいいのだが、自炊をするのは面倒だ。近くのスーパーで適当な弁当でも買って来ようか。いや、どうせ一人で食べるのだから豪勢に好物の寿司でも取ろうか。胸の奥で渦巻くチリチリする気持ちを抑えつけるように、食べ物の事に意識を集中させようとした。母さんはきっと今夜、西園寺と会うのだろう。俺は言いようのないイライラを無理やり胸の中に閉じ込め、紺色の前開きパーカーを手に取ると、財布を尻のポケットに入れ、そのまま玄関を出た。ボーっと夕焼けを眺めながら川沿いの土手を歩いていると、急に何かにぶつかった。キャンという甲高い声と共に、足に鋭い痛みが走った。下を見ると、白い物体が足首に食らいついているようだった。
「すみません！　大丈夫ですか？」
突然背後から、少し高めの男の声がした。男は数メートル後ろから全速力で俺の方に走ってくる。
「コラ！　モコ！　ダメじゃないの！」
白い物体は犬だった。モコと呼ばれる犬は、俺の右足首に噛みついていたようで、ジーンズの裾を少し上げると、白い靴下に赤いシミが広がっていた。その男はますます顔を青くして、「キャー大変！　今すぐ手当をしないと」と小さく悲鳴を上げながら、俺の足首にそっと触れた。そして「あの、病院がすぐ近くにありますから一緒に……」と男は慌てふためいた様子で言った。
「触んなよ」
「え？」

「だから、触んなって言ってんだよ」
男はあわてて俺の足首から手を引いた。
「お前、犬の躾してないだろ。ちゃんと紐ぐらい持ってろよ」
「血が出てるし念のために病院に行った方がいいわ。あと、これは紐じゃなくてリードって言うの」
「そんなことよりさっさと消えてくんないかな」
男はオロオロしたような表情で、再び足首を見つめた。
「消えろって言われても、アタシこのままじゃ帰れない。ダメよ、絶対にあなたを置いて行けない」
男は“アタシ”という一人称を使い、手をくねらせながらしゃべり続けた。
「ここじゃなんだし、そこの喫茶店に入りましょ。連絡先とかも紙に書いて渡したいし。治療費も全額払わせて」
黙り続けていると、男は懇願するような目つきで両手をすり合わせてきた。
「一分でいいの。手間は取らせないわ」
俺は不穏な気持ちのまま、喫茶店に入った。断るべきだったと後悔しつつも、男のしつこそうなオーラに圧倒されてしまったのだ。
男は窓際の奥の席に座り、俺はその向かい側に座った。
「自己紹介をしてなかったわね。ごめんなさい。白井鼓太郎です。この子はモコ。一応血統書つきのチワワなんだけど、今発情期で気が荒いのよ。本当に申し訳ないことをしてしまったわ。足はまだ痛むわよね？」
黒いエプロンをした初老の店主らしき人物が注文を取りに来た。鼓太郎はモコの背中を撫でながら、「私はいつもの。こちらの方にも同じものを」と告げた。
「あらヤダ、つい勝手に注文しちゃったわ。あのね、ここのパフェがすっごくおいしいのよ。甘いものは苦手？」
「いや」
俺は短く返事をして、そのまま下を向いた。

「あなたもスイーツ好きなのね。アタシ、食べるのも作るのも好きなのよ。甘いものって人生を豊かにしてくれるって思わない？　日本で男がスイーツ好きなんて言うと気持ち悪いって思う人もいるみたいだけど。そんなこと男女平等の精神に反しているわよねぇ。男だってカフェのテラスで堂々とパフェを食べたいのよ」

俺は黙って鼓太郎が喋っているのを聞いていた。

「そうそう、アタシね最近Ｍｉｎっていうサイトで新しいグループを始めたのよ。スイーツ好きな男子だけを集めて少人数のオフ会をやるのが夢なの。みんなでスイーツ批評をしたりして。楽しそうでしょ？」

「さっきから男、男って言ってるけど、その話し方は何なんだよ。なんか女みたいで気色悪りぃんだけど」

「あらー、気づいちゃった？　アタシ、名前は鼓太郎で古風な日本男児なんだけど、中身はそうじゃないの。完全な女の子でもなく、完全な男の子でもない。不思議でしょ」

「はぁ？」

「勢いでカミングアウトしちゃった。うふふ」

「マジで意味わかんねぇよ」

「意味なんかわかんなくていいの。ここのパフェを食べれば、そんな下らないことすぐに忘れちゃうんだから」

マスターがパフェをテーブルに上に置いた。

「当店特製のベリーズパフェです」

高く渦巻くソフトクリームの上には、ストロベリー、ラズベリー、ブルーベリーの三種が混ざったソースがたっぷりとかかっていた。

「溶ける前に早く食べて、ね？」

鼓太郎は片目をウィンクさせてそう言った。言われるがままに、ゆっくりと口の中にスプーンを運ぶ。シンプルな見た目とは違い、口の中に今まで経験したことのない深い味わいが広がった。ベリー三種の爽やかな酸っぱさと、濃厚な生乳のテイストが絶妙にマッチしている。

「うまい」
俺は思わず口を滑らせた。
「でしょ？　でしょ？　やっぱり通にはわかるのよね、この味が」
鼓太郎は頬を紅潮させたまま、ガタンと立ち上がった。そしてマスターの方に向かって親指を立て、「おいしいって！　やっぱり世界一の味よ」と大声を出した。幼稚園児のようにはしゃぐ鼓太郎を見ていると、なんだか急に憎めないような感情が胸を支配し始めた。
「櫻井悠」
「え？」
「俺の名前。自己紹介してなかったから」
鼓太郎は満面の笑みを浮かべた。
「教えてくれて嬉しいわぁ。悠くん、よろしくね」
「悠でいいよ」
「大学生？」
「いや、高校生」
「どうりでお肌がすべすべで綺麗だと思ったわ。ティーンだけが持つ輝きを放ってるの。こんな美男子と出会えるなんてアタシってツイてる！　今日は最高のハッピーディよ」
「言っとくけど、俺ゲイじゃないから」
「そんなことわかってるわよ。予防線を張らなくたって一目見たらわかるんだから。悠は最初からノーマルだって思ってたわ。でも、顔はもろアタシのストライクど真ん中！　目の保養ね、目の保養」
じっと俺の顔を見つめる鼓太郎の視線に耐えかね、すぐに話題を変えた。
「ところでさっき言ってたグループの話なんだけど」
「スイーツの？」
「そう」
「『男子スイーツ倶楽部』よ。アタシが管理人なの」

7

教室に入り自分の席につくと、あかねと洋人がいつものように俺の隣にやってきた。
「その足、一体どうしたのよ」
あかねがビックリしたような顔つきで尋ねた。
「別に」
「機嫌悪いなー」
あかねは小さくつぶやくと、「悠は秘密主義だもんね」と言いながら洋人の方を向いた。
「お前が怪我するなんて珍しいじゃん。とっくに部活なんて辞めちゃったのにさ」
「さっき足引きずってたでしょ」
あかねは早口でそう言うと、「いつでも肩貸してあげるよ。悠なら大歓迎」と明るく笑った。洋人はそんなあかねを見て、不満そうに頬を膨らませた。
「俺にはやってくれないのかよ」
「あ、先生だ」
あかねと洋人は前をちらっと見て、自分の席へ戻って行った。
「それでは一時間目の授業を始めます」
白いブラウスの上にベージュのジャケット、そして黒い膝丈のタイトスカートを履いた大山が教室の壇上に立った。
「起立」
日直係の覇気(はき)のない声が遠くで聞こえた。俺は皆より一歩遅れ、右足をかばうようにしてゆっくりと立ち上がろうとした。その瞬間、大山のピシャリとした声が教室中に響き渡った。
「櫻井君、ダラダラしないで」
「先生っ、櫻井君は足を怪我しているんです」
間髪入れずに、あかねが声をあげた。

「あら、そうなの。じゃ、無理に立たなくていいから」
大山は俺の方を見て、意味ありげな微笑を浮かべた。生徒たちが着席した直後、突然誰かの携帯から大きな着信音が流れた。
「授業中、携帯の電源は切るって決まりでしょう。一体誰なの？」
大山が腕組みをしてイライラしたような声をあげた。生徒は誰も声を出さず、教室はシンと静まり返った。
「決まりは守らないといけないわ。もう高校生なんだからそれぐらいわかるでしょ？　学校に携帯なんて必要ないのよ、本来は。でも、あなたたちのお父さん、お母さんがうるさいから学校は仕方なく許可をしてあげているわけ。そもそも授業中に電源が入っているなんておかしいわよね？　授業を聞く気があるのなら、先生への敬意を示してほしいわ。私、ルールを守れない生徒は嫌いよ」
結局、一時間目の国語の時間は説教で始まり説教に終わった。大山は興奮すると熱く持論を語り始め、チャイムがなるまでぶっ通しで喋り続ける。生徒たちが飽き飽きした表情を浮かべていてもお構いなしだ。
「櫻井君、ちょっと」
大山はチャイムが鳴り終わるのと同時に、俺の机の方に歩いてきて手招きをした。
「この前の話なんだけど」
「この前？」
「櫻井君の生活態度について。もう忘れちゃった？」
「あぁ、覚えてます。だけど、別に話すことはありません」
「私にはあるのよ。とにかく放課後、進路相談室に来て。いいわね？」
「今日は時間がないんですけど」
「じゃ、お母さんに連絡するわね。あなたのそのサボり癖について相談しないといけないから」
「は？　親には関係ないはずです」
「いいえ、関係あるわ。あなたが来ないなら親御さんを呼ぶしかな

いわね」
俺は胃がキリキリ痛むのを感じながら、強引な人間は罪だと思った。自分の意見を盾に他人の気持ちを潰してしまうのだから。そのうえ本人には罪悪感がまったくないから余計に性質(たち)が悪い。
ホームルームが終わった後すぐに、進路指導室の引き戸を開けるとそこには既に大山が待機していた。
「まずは座って」
大山は教室の真ん中に置かれた二人掛けのソファーに座っており、俺には目の前にある向かい側のソファーに座るように言った。
「まずはお礼を言わないといけないわね」
「お礼？」
「櫻井君がいなかったら、私パニックになっていたと思うの」
「俺は何も」
「この前の地震の時……」
「あぁ、そういえば」
うっすらとした記憶が頭の中に蘇ってきた。
「櫻井君って実は優しい子なのよね。それがわかって嬉しかった」
大山の声に被さるように、聞いたことのあるメロディーが突然カバンの中から鳴り響いた。
「ごめんなさい、電話だわ」
大山は小走りで部屋の隅まで行くと、小声で話し始めた。
「学校には電話しないでって言ってるでしょ。何度言ったらわかるの？　今日はちゃんと病院に行くから。だからそこで待ってて。いい？」
携帯を左手に握ったまま、大山は浮かない表情で戻ってきた。
「とにかくお礼だけでも伝えられて良かった。本当にあの時は助かったわ。私、子どもの時に大きな地震を経験してて。それ以来揺れが怖いの。恥ずかしい話なんだけど、あの時は体が硬直して動かなくなっちゃって」
大山は照れたように頬を赤く染め、ドアの方へ歩きながら言った。

「今日はもういいわ。帰って」
俺は肩かけカバンを手に取ると、進路指導室を後にした。外靴に履き替えて校門を出ると、今まさにオレンジ色の太陽が家と家のすき間に沈みこもうとしていた。春の風が、頬をひんやりと刺激する。まるで俺の乾いた心を突き刺すかのように冷たく、重い。地震が起こったあの日、俺は無意識に大山の怯える姿と昔の母さんの姿を重ねていた。母さんは俺の父親に捨てられた後、他の男と付き合い始めた。相里という名のモヤシみたいな男だった。相里はアルバイトでパチンコ屋の店員をしていたが、うちに転がり込んで間もなくヒモ男に成り下がった。母さんはピアノとモデルスクールの講師をしながら、四歳の息子とヒモ男に飯を食わせていた。最初は「不景気だから仕方がないのよね」と相里に同情的だった母さんも、日に日に仕事を探すよう催促するようになり、口喧嘩が絶えなくなった。その頃からだろうか――相里が母さんに暴力を振るうようになったのは。母さんがぶたれるたびに、蹴られるたびに、俺は叫んだ。「やめろ！」と何度も何度も泣きながら懇願した。母さんの前に立って男から浴びせられるパンチを受け止めようとした。でも幼かった俺は簡単に張り倒されてしまった。俺は無力だった。できることといえば、隠れて祈ることだけだった。布団の中で頭から毛布を被り、神様に「ママを助けてください」と毎晩涙が枯れるほどに祈り続けた。そんなある日、相里はキッチンで料理を作っている母さんに「別れよう」と告げた。俺はドア越しに相里の声を聞き、ついに神様が母さんの味方になってくれたんだと喜びに体を震わせた。ところが――母さんは予想外の言葉を口にした。
「私を捨てないで。一人にしないで」
母さんは相里の背中にしがみついた。だが、それを力いっぱい肩で振り払うようにして、相里は家を出て行った。カレーライスの匂いが漂うキッチンで、母さんは顔を床に伏せて大粒の涙を流し始めた。ティッシュ箱が空になってしまうんじゃないかってくらいに涙を流し続けた。俺は静かに母さんの背中に回り、後ろから力いっぱ

いぎゅっと抱きしめた。

「ママは一人じゃない。僕がいるよ。僕が守ってあげるから」

8

携帯から流れる着信音で目が覚めた。おもむろにベッドから上半身だけを起こし、サイドテーブルに手を伸ばす。壁にかかった時計を見ると、時刻は朝八時を回っていた。

「せっかくの休みなのに。こんな朝早くから誰だよ」

文句を言いながら携帯の画面に目をやると、メールが一通届いていた。今週末にオフ会をやるから所沢の「黒猫モジャカフェ」に集合と書いてある。差出人は、自分自身を“アタシ”と呼ぶあのオカマだ。俺は基本的に面倒臭そうなものには近寄らないようにしている。よって、オフ会なる集まりにも顔を出す気は毛頭なかった。

「今日は病院の日でしょ？　ちゃんと行くのよ、わかった？」

母さんが心配そうな顔で、皿を洗う手を休めてダイニングテーブルに座る俺の方を向いた。

「わかってる。これから行こうとしてたんだよ」

「せっかく開校記念日で休みなのに。病院に行かなきゃいけないなんて可哀想だわ。悠ちゃんの足を噛むなんてどこのバカ犬なのかしら。躾ができてないペットなんて歩かせるべきじゃないわよ。こっちは三針も縫う怪我だっていうのに」

俺は「大丈夫だから」と小さく言い、ぬるくなったコーヒーを一気に飲み干して席を立った。

「行ってきます」

母さんに聞こえるように大きな声で言い、玄関のドアを閉めた。歩いて五分もしない場所にバス停がある。そこからは病院行きの直行バスに乗ればいいだけ。時刻表を確認して時間きっかりに到着したのに、まだバスは来ないようだ。時刻表によれば五十分には来るはずなのに、今日もバスは五分以上遅れているようだった。俺は昔から待つのが嫌いだ。ムシャクシャする気持ちを抑えられず、目の

前の「停留所」と書かれた棒を足で蹴り上げた。ゴンッという大きい音と共に、すすけた銀色の棒が少しへこんだ。
「ひどい……」
ふいに背後から若い女の声がした。振り返ると、裾がふわっと広がった膝丈の白いワンピースに黒いストッキングを履き、白いフリルのついた傘を持った美女が顔を歪めていた。胸元には大きな赤いリボンがついており、丸い襟の下には校章が小さく刺繍されている。見覚えのあるこの制服は、聖マヌエル女子高のものだ。
「モノに八つ当たりするなんて」
白いフリル傘の女は呆れたような顔を浮かべ、ため息をついた。丸くて大きな瞳で俺をキッと睨み、頬をピンク色に染めて腕組みをしている。
「子どもだって見ているのに。私が今ここで通報したら、器物損壊で捕まるわよ」
バス停に並ぶ親子連れの視線を背中に痛いほど感じながら、俺は軽いパニックに見舞われていた。
「ねぇ、ちょっと！　無視してないで何とか言いなさいよ」
白いフリル傘の女は赤い唇を尖らせながら、一歩、二歩とジリジリ近づいてきた。そしてあと数センチでお互いの体がぶつかるというところで、バスがプシューと大きな音を立てて急停車した。十分以上の遅れを取り戻すかのように、荒い運転でもしてきたのだろう。いつもの停車位置より十センチ以上離れて停まった。俺は高鳴る心臓の音を耳の奥で聞きながら、目の前でドアが開くのをスローモーションの映像を観るかのように見つめていた。まるで風邪を引いた時のように、頭が熱く、ボーっとしている。
「早く入ってください」
白いフリル傘の女は俺の腕を細い指でつかんだ。ドアが開いたのに一向に足を動かそうとしない俺を見て、既にバスに乗り込んでいた数人の乗客も不思議そうな顔を浮かべていた。「発車します」という声がはるか遠くで聞こえたような気がした。そして、次の瞬間

――。俺はバスの床に思いっきり投げ出され、尻もちをついてしまった。キャーという声と同時にバスは再び急停車し、運転手と白いフリル傘の女が駆け寄ってきた。
「お客さん、大丈夫ですか？　立ち上がれますか？」
運転手は青ざめたような表情で、俺に話しかけた。
「気にしないで運転してください」
「怪我はないですか？」
「大丈夫ですから」
「でも……」
「いいから戻ってください」
俺の強い口調に圧倒されたのか、運転手は不安そうな顔でチラチラと後ろを振り返りながら運転席へ戻って行った。
「どうぞ使って」
白いフリル傘の女は、泣きそうな顔のままで俺の右手にハンカチを握らせた。
「手首から血が出てる。手当てしなきゃ」
ハンカチをよけて手首を見ると、床で擦れた皮膚から血が滲み出ていた。出血量の割に痛みは感じなかった。
「いいよ、平気だから」
俺は平静を装いながらも、ドキドキと強く胸を打つ心臓の鼓動に明らかな動揺を感じていた。「総合病院前」とアナウンスが流れたのを聞き、「次で降りるから」と俺は下を向いたまま口を開いた。バス停に着くなり、俺は早歩きで外へ出た。運転手はまだ心配そうな顔を浮かべていたが、これ以上恥の上塗りをしたくないという俺の気持ちを察したようで無言で送り出してくれた。
「あの……」
病院に向かって歩き出した瞬間、ふいに背後から声がした。振り返ると、俺のすぐ後ろに白いフリル傘の女が困ったような顔で立っていた。
「え？　なんで？」

「私のせいって思われたらヤだし。それにハンカチも」
「同じの買って返すよ」
「無理よ。そのハンカチ、日本では売ってないから」
白いフリル傘の女は、肩より少し長い黒髪を揺らして俺の横に並んだ。女の横顔を見た瞬間、俺の心臓は再びキュっと締めつけられ、途端に息ができないような苦しさを覚えた。
「ハンカチはクリーニングに出してから郵送する。連絡先はここに書いて」
俺はジーンズのポケットからクシャクシャになったガムの包み紙を出し、わざと冷たく突き放すような口調で言った。

9

浴槽に浸かりながら、今日バス停で起こった出来事を思い出していた。白いフリル傘の女はガムの包み紙にサラサラとメモを書き残しながら、首をかしげて言った。

「あなたと会うのは初めてじゃないと思う。どこかで前に見かけたような気がするの」

俺はすぐに否定したが、白いフリル傘の女は納得がいかないようだった。数秒考え込んだ後、女は丸い瞳をさらに大きくして「あっ」と小さく声を出した。

「思い出した。緑二高の二年C組、櫻井悠」

「え？　なんで？　なんで知ってんの？」

「うちの学校では有名よ。ほら」

白いフリル傘の女がカバンから素早く携帯を取り出して指で画面を操作し始めた。そして、携帯を俺の方に近づけてきた。ちらっと見た瞬間、洋人の言葉を思い出した。あの日学校の屋上で、俺の情報をプロフィールの中に書き込んだって言ってたよな……。削除するように言ったのに結局無視か、あいつは。胃のあたりにキリキリとした痛みを感じたが、白いフリル傘の女と目が合った瞬間、そんな気持ちは一気に吹っ飛んでいった。脳からアドレナリンが大量放出されているせいか、心臓がドキドキして気分がこの上なく高揚している。この得体の知れない感情は一体何だろう。俺が俺自身じゃなくなっていくようで、なんだかそら恐ろしかった。

浴室を出て、俺は脱衣所に脱ぎ捨ててあるジーンズのポケットを探った。手のひらにザラっとした感触が伝わる。探していたガムの包み紙はすぐに見つかった。だが、この紙を開くかどうかで俺は随分と悩んでいた。白いフリル傘の女なんて、最初から単なる幻（まぼろし）のようにも思えるのだ。もし開けてみて、それがただの紙だったら？

最初から白いフリル傘の女なんて存在しなかったら？　考えれば考えるほど、現実を知るのが怖い。だが、俺は心の奥底で中身を知りたいと渇望していた。一瞬目をつぶり、ぐっと指先に力を入れて中を開く。メモには丸っこい文字で、宮川　美衣という漢字に、みやかわ　みいとふりがなが振ってあり、その下に携帯のメールアドレスが書かれていた。

「みやかわ　みい……みやかわ　みい……」

俺は腰にベージュのバスタオルを巻いただけの姿で、包み紙を右手に握ったまま女の名前を数回呼んだ。

その夜、久しぶりに夢を見た。地平線が見渡せる広い野原のような場所で、俺は苺を摘んでいた。楽しそうに鼻歌まで歌っている。手のひらいっぱいの苺を抱えて、俺は急に走りだした。目指した先は大きな木の下で、そこには誰かが幹にもたれかかって立っていた。真っ白いワンピースの裾が風に吹かれてゆらゆらと揺れている。目深に被ったつばの大きな麦わら帽子からは、肩より少し長い黒髪がのぞいていた。後姿からは誰なのかがまったく判断できない（そもそも俺にとって女はみんな同じに見える）。俺が甘い香りのする苺を腕に抱えて小走りで近づいて行くと、女はクルリと振り返ってこっちを見た。麦わら帽子のせいで顔がよく見えない。でも、俺の心はまるで海辺で見る夕焼けのようにキラキラと輝いていた。理由はわからないが、とにかく“嬉しい”という感情だけが強く残っていたのだ。翌朝、目がさめてからも俺の心は弾んだままだった。小さな子どもがずっと欲しがっていたおもちゃをやっと手に入れた時の嬉しさに似ているのかもしれない。何か足りなかったものがカチっと心にはまったような気がして、俺の心は幸福感で満たされていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5362y/

男子スイーツ倶楽部

2012年1月12日23時55分発行